

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日常的に理念の確認をしており(掲示も含む)理念の共有を実践につなげている。	ホーム独自の理念があり、それに沿った基本方針を掲げ、利用者の安心と尊厳を守り、できることをしていただきながら家庭的な環境で暮らしていただくことに全職員で取り組んでいる。職員にはことある毎に話し、特に入職時には目指す方向性としての理念を説明し、その後のケアに反映させるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月日を重ねるごとに、地域のたくさんの方が訪れてくれる。また、地域の行事等は出来るだけ参加し、日常的に交流している。	一軒の家として自治会活動に参加し利用者も地区の高齢者と関わる機会が多い。ホームが近所の住民のサロ的な役割を果たしており、普段の生活の中で人々が立ち寄ることも多く、利用者も地区の集いにスムーズに参加できるようになっている。ホームの催しにも大勢のボランティアが関わり、特に、ホームの夏祭りは開設から11回を数えるまでになっており地区の人々にとってもふれあいの場となっている。保育園児との交流や中学生の職場体験の受け入れなど年少人口指数(0~14才)が高いという町の特性に合わせ高齢者や福祉・介護が身近にあるということを感じていただくような取り組みもしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の高齢者とのお茶会を行ったり、地域の方々との交流の中で、認知症の理解や支援を自然に伝えている。地域の自立高齢者に対し、看護師による健康相談や食事提供及びサロンの場所となっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議については、全職員に伝達及び閲覧してもらい、必要なことはケース会議等で検討している。サービス向上には活かしつつある。	年6回開催している。議題によってはゲストを招くこともあり、利用者、家族、区長、児童民生委員、老人クラブ会長、ボランティア会長、町職員、地域包括センター職員などが出席し利用状況や活動報告後、意見やアドバイスを頂いている。花見や夏祭りの打ち合わせ、避難訓練や年末のボランティアとの反省会などを兼ね会議を開くこともあり、実際に、利用者やホームの様子を見たり聞いたりしていただく機会も設けている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	町とのつながりは、運営推進会議、訪問調査、地域ネットワーク会議がある。今年は、利用者家族のことで地域包括と連絡を取り合った。今後も今以上に良い関係を作りサービスの質の向上に取り組んでいきたい。	町と地域包括支援センターの主催する地域ネットワーク会議(地域ケア会議)に法人の他の3事業所と交替で出席し情報を共有している。介護認定の更新の際にも認定調査員がホームに訪し職員から現状説明をしており家族が立ち会うこともある。法人全体でSOS徘徊ネットワーク構築への取り組みをしており町とも関わっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」について会議で話し合いをし、身体拘束をしないよう努めている。	玄関は屋間常に開錠しており、誰でもが自由に出入りできる。身体拘束をしないケアについての県研修などを受け、受講者がホームの会議で伝達講習をしている。外出傾向の強い利用者には職員が外と一緒に出かけ落ち着いた時点でホームに戻っている。地域ぐるみで行われるSOS徘徊模擬訓練への参加を住民に呼び掛けたり、地域の人々からもホーム利用者が一人で外を歩いているような時には声を掛けていただいたり教えていただいている。	

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待については、虐待が見過ごされないよう、常に注意を払っている。また、職員が研修に行き会議の中で伝達講習を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	成年後見制度を利用されている方が入居されたので、保佐人をお願いし学習会を開く。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書面及び口頭で行い理解、納得してもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来所時には、何でも言ってもらえるような雰囲気作りに留意している。また、ケアプランの説明時には必ず確認している。出された意見、要望等は連絡帳に記録したり、ケース会議で話し合い反映している。	自らの思いや意見を表わすことのできる利用者が半数以上おり、時には不満や愚痴ともつかないつぶやきを言うこともあり職員はその真意を推し量りケアに活かしている。毎日ホームを訪れる家族もあり、少なくとも月に1回は来訪されるので職員から様子を知らせ要望などを聞いている。食事を兼ね11月に家族会を開催し家族から意見・要望などをいただき運営に反映している。家族宛に毎月発行するホームだより裏面に一人ひとりの利用者の暮らしぶりを書き入れ届けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見や提案は聴いてもらえる。相互関係が良い為、反映できている。	前月末に法人事務局会議があり管理者が出席し、第一火曜日の午前中にはホームのケース会議も開かれ、その中で事務局会議の報告などが行われ意思疎通を図っている。また、一日2回の申し送りもあることから日常的な関わりの中で職員間で何でも言い合える職場風土となっており、気づきや提案などが運営に取り入れられている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	組織改革を行い相談環境をより多くするなど、いっそう向上心をもって働ける環境にしていってもらえている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修に参加したり、社協内部の研修を行っている。本人が行きたい研修を受けられる機会を設けている。		

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	広域による学習会等に参加したり、相互交流を行うなどして広域全体のグループホームの質の向上を目指している。今年度は法人内にできたグループホームと交流を行い良い刺激を受けてきている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に管理者、職員が本人に会い、現在の状況や、グループホームに入居してから、どんな生活を送りたいか聴く機会を作り対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	今回は成年後見制度を利用している方が入居されたため、入居に際し保佐人、家族らと数回話し合いを行い本人が安心して入居できるよう体制を整えた。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、ご家族だけではなく担当のケアマネージャーや、今まで利用されていた事業所の関係者と話し合いを持ち、その人が必要なサービスを見極め支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者のできる力を奪わず、利用者の力を存分に発揮していただけるよう、調理等の日常生活行為を行ってもらっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族とは密に連絡を取り、本人を支えるよう努めている。ご家族も安心して来所してくれている。毎月家族に「寄り添い向き合い」のお手紙を出している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの理容師が来てくれたり、町の行事等に参加したり、昔からの友人等にも声掛けを行い交流の機会を作り、関係が途切れないよう努めている。	現在の利用者は全て町内からの方で友人や知人の来訪も多い。自分で電話で話したり、年賀状をいただき喜んでいる方もいる。同じ法人で運営している宅老所に通っていた利用者はそこで行われる音楽リハビリに誘われて継続して参加している。年末年始、お彼岸やお盆、法事などに自宅に戻り近所の方と旧交を温める利用者もいる。	友人や知人も高齢化し自主的に訪れる方も少なくなってきた。ホーム利用後に訪れる地区の住民との新たな馴染みの関係もできてきているが、更に、次代を担う近隣住民との関わりも深めていただくことを期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個別に話を聴いたり相談にのり、入居者同士の関係が上手くいくように、職員がそれぞれの利用者に応じた対応している。		

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームを退去する時は亡くなる時の方が多いため、グリーフケアに取り組んでいる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	その方の今までの生活歴を把握し、希望、意向に添うように努めている。把握が困難な方に対しても、行動を行う前には必ず話しかけを行っている。	言葉で思いや意向を表せる方も半数以上おり、食事や外出、入浴など日々の支援の中で把握するようにしている。言葉で表すことができない利用者には目や顔の表情、しぐさなどから読み取り、選択できるように声がけや働きかけを行っている。途切れがちではあるが、「うれしい」、「いやだ」などの利用者間の会話にも注意し、その背景を探り支援に活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	聴き取り、フェイスシート等の内容の共有ができており、これまでの暮らしの把握をしている。生活していく中で本人、ご家族及び以前利用していた事業者の関係者より情報を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者の心身状態を把握したうえで、一人ひとりに合った生活を支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、ご家族と必要に応じて話し合いを行っており、現状に即した介護計画を作成している。又、会議において毎月プランについて話し合っている。	利用開始時に家族などから集めた情報に利用後の職員が新に得た情報を加えホームでより良く暮らすための介護計画を立てている。計画の見直しは3ヶ月毎に行い、2～3名の方をローテーションを組んで毎月のケース会議で検討している。入退院があり状態が変わった場合にはその都度変更を掛けている。援助目的や内容も具体的で分かり易く家族来訪時に説明をし理解をいただいている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一日2回の引継ぎ時に申し送りを行うとともに、ケース記録等の記録により、情報の共有を行い、個別ケアの実践や、介護計画の見直しに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて、通院支援を柔軟に対応している。また、家族が来所された時には、気持ちよく長時間過ごしていただいたり、利用者と一緒に食事をとっていただく方もいる。		

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が安心して地域での暮らしを続けられるよう区長、民生委員をはじめ、地域の方にグループホームへ訪れてもらえるような声かけをし来ていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に主治医や緊急時の病院について話し合い、それに添って支援している。体調の変化により、主治医が変わる事もある為、その時々話し合いを持っている。往診してくれる医院とは密な関わり持ち、適切な対応を受け、より正確な情報を得られるようにしている。	基本的にはホーム利用前からのかかりつけ医を継続している。現在、2名の医師との連携をホームの看護師が取っている。受診の付き添いについては家族にお願いをしているが都合がつかない時には看護師が同行することもある。家族への報告や職員間の情報共有のために「受診ノート」が有効に活用されている。隣接する法人本部の看護師とも連携がとれるようになっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置しており、常に入居者の健康管理や状態変化に応じた支援を行っている。また社協本体の看護師の支援も受けられるような体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には本人の支援方法に関する情報を医療機関に提出している。入院中は、職員が顔を出し、状態を全職員に伝えている。家族とも情報交換を行っている。退院時には医療機関よりの説明を受けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に向けて指針ができていて、家族に説明してある。またその時々で話し合いを行っており、方針を共有しチームで支援に取り組んでいる。また、法人もその時々において支援体制をとってくれる。	ホームから退居した事例の殆どは病院で亡くなるかホームでの看取りを経て最期を迎えられたケースで現在の利用者の方についても家族の意向もありホームでの看取りを希望される方が多い。契約書にも「看取りに関する指針」が明記されており、状態の変化に伴ないその時々家族や関係者と話し合いながら支援している。今までの事例では食が細り比較的短期間に枯れていくような平穏死が多いという。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年度は、消防署の講習、実践を受けていないが、会議にて、看護師より急変、事故発生時の対応についての説明を何回も受けているし、職員個人的にも指導を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災に対する訓練は地域の方々と共に年に2回行っている。地震、水害に対する訓練は行っていないがそれぞれの対応は説明を受けている。地域の人に対しては、運営推進会議で協力を呼び掛けている。また、職員が県よりの講習会に参加し伝達講習をしている。	年2回、避難誘導訓練を主に実施している。3月は昼間、9月には実際に午後6時から夜間の訓練を実施し地元の消防団の指導も得ている。利用者もその都度参加し、隣家の方をはじめ近所の住民も駆けつけ避難後の利用者の見守りをしている。職員も毛布を使用し利用者を避難させるなど現実に即した訓練が実施されている。ヘルメット、スプリンクラーなどの防火用品・設備も整い、非常食も2日分備蓄され、万が一の場合近所の住民に配ることができるようになっている。	

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	長く生きてこられた事を常に頭に置き、人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応を心掛けている。	職員の入職時研修、ボランティアや実習生の初日などに倫理や接遇について説明し、人生の大先輩として接するための言葉遣いや態度について周知している。馴染みの人間関係から利用者に対する不適切な言動が見られた場合には職員間でも注意し合っている。排泄や入浴の時の異性介助については利用者の気持ちを大切に無理強いすることなく本人の望む形をとっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その方らしい生活を支援し、日々の希望を聴けるような関係作りに努め、言葉だけでなく表情からも読み取り、自己決定できるような働きかけを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、それに合わせた対応を心掛けている。またしたい事がかなえられるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	TPOに合わせて本人の希望を聴きながら、その人らしくできるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立を一緒に考え、準備や片付けを一緒にやっている。一緒に行えない利用者には、自宅での調理方法や味付けを聞きながらやっている。食事は一緒に摂っている。	自立されている方が半数近くおり、介助を必要とする利用者もいる。ご飯や副菜は若干軟らかめであるが全利用者が常食で、夕食以外は利用者の食べたい時間に時間をかけて摂っている。利用開始時にミキサー食の方がホーム利用後に常食となった事例もあり、一人ひとりの状態を見極めおいしく食べれるように配慮している。ホームの畑も広く野菜が収穫され、地域の人々からの頂き物も加え食卓を彩っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスはメニュー表を見て偏らないよう心掛けているが、法人内の管理栄養士にメニューを見てもらい助言を受けている。水分量、食事は必要に応じチェックし記録している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝夕の口腔ケアはチェック表に記入している。昼食後行っていない人もいるが、お茶を飲み口腔内を清潔にしてもらっている。		

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿意便意のない人でも日中は布パンツを使用し、一人ひとりに合った排せつパターンを把握しトイレ誘導を行っている。また、失敗しても他人に知られないよう心掛けるなど本人の自尊心を傷つけないような配慮をしている。	他の利用者に見られたくない、知られたくないというプライバシーに配慮しながらトイレでの排泄を支援している。排泄チェック表についても冷蔵庫の陰になる場所に貼り日勤の職員が主に記録しパターンを把握している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分、食物繊維をとるよう心掛けて、自力排便が行えるように工夫している。その人に合った排便パターンで、下剤、浣腸は主治医と相談しながら使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者の希望に沿った入浴を行っており、曜日、時間は決まっていない。入浴を拒む人に対して、言葉がけや対応の工夫、チームプレイにより納得したうえで入浴していただいている。	洗髪のみ手伝う方や一部介助の方もいるが全介助の利用者が多い。毎日入浴する方もおり、昼食を挟んでの午前、午後に利用者の希望に沿って入浴をいただいている。リフト浴を利用する方もシャワーチェアに座りながら浴槽に浸ることができるので安心して快適な入浴ができています。菖蒲湯や柚子湯、入浴剤などで楽しむこともある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、夜間安眠できるような生活を心掛けると共に、その時々状況に応じ、日中も休んでいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	分かりやすく薬が整理されており、一人ひとりの薬について理解している。処方の変更された時も、職員全員に伝えている。服薬の確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	台所仕事など得意分野で力を発揮してもらえるような支援を行っている。また、外を散歩したり、CDを聞くなど一人ひとりに合った楽しみごと、気分転換の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	積極的に外出できるよう支援している。(散歩等)また、地域の人たちや家族と一緒に出掛けてたりしている。家族とは自由に外出してもらっている。	季節や天候が良い時にはホーム周辺を散歩している。同じ法人が運営する隣接の日帰り施設・ハートピアで行われるサロンやイベント、地区の「ふれあい食事会」、「敬老会」などにも出掛けている。ハートピアのリフト車を使い、利用者のご家族から借りた軽トラックに車椅子を載せ、いちご狩りや外食などにも出掛けている。	

グループホームみよた

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っている利用者とは一緒に買い物に行きお金を払ってもらっている。また、自分でお金を持っていない人でも自分でお金が払えるような支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者からの希望があればいつでも電話をしたり手紙を出すことができる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、一年を通しての行事を行うなどで、季節感を感じてもらい、その時々で配慮を行い、居心地良く過ごせるよう工夫している。また、職員も環境の一部としてその時々での行動を行っている。	和風の外観と同じくホームの玄関も重厚で広く、正面には書のかな額が掛けられている。中の引き戸を開けると利用者が集う居間兼食堂があり、食卓テーブルが中央に二つ置かれキッチンからも話ができるほど顔と顔が近い距離にある。明り取りのついた天井で、庭に面したガラス戸も一枚ガラスであるので陽射しも入り全体が明るい。ファンヒーターやエアコンも設置されており心地良い温度設定がされていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間、リビング等その時々でその人らしく過ごせるような工夫をしている。また食堂、リビングは一体的ですべてが視界に入ってしまう為、廊下にいすを置き、一人で過ごせるスペースを作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が以前使用していた物を搬入してもらい、その人らしく生活できるような工夫をしている。またその時々状況に応じて、家族との連絡を取り合い、その人に必要なものを用意してもらい使用していただいている。	各居室は畳と障子で押入れもあり、純和風の造りとなっている。寝具については布団を使用されている利用者もあり、畳の上に絨毯を引きベッドを置かれている方もいる。利用者により自宅から持ち込むものに違いはあるが使い慣れた大小のタンスを並べ、その上にご主人の遺影や家族の写真などを置いている居室も見られた。各居室にはパネルヒーターがつけられ適温に保たれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物は一人ひとりの身体機能を活かした生活ができるように造られている。その人の残存機能に合わせた生活が送れるよう工夫している。居室内も自立した生活ができるよう一人ひとりに合わせた工夫をしている。		